# 博士論文（要約）

# 日本留学における「グローバル人材」の形成：留学による「自己形成」の視点から在日留学生の経験に接近して

東京大学大学院教育学研究科

譚　君怡

本研究の目的は、留学による「自己形成（self-formation）」の視点から、在日留学生が「グローバル人材」として形成されていく経験を描き出すことである。そして、その経験から留学生を取り巻く学習環境や社会的文脈を描き出すことによって、日本の留学生教育における「グローバル人材」育成の特徴と課題を明らかにすることである。

近年、日本においても高まっている「グローバル人材」の需要は、留学生の受け入れ理念にも反映されている。その理念は、以前の「国際理解・国際協力モデル」から、近年は「高度人材獲得モデル」へと転換してきている。そして、大学には、留学生を誘致し、人材を育成していくという役割が期待されている。

しかしこれまでの、大学における「グローバル人材」育成についての議論では、日本人学生がその対象として取り上げられてきた。そして、国際的背景を持つ在日留学生はまるで自動的に「グローバル人材」となるかのように扱われてきた。留学生の誘致戦略や大学への受け入れ体制についての研究はなされてきたものの、留学生が入学した後の人材形成についてはあまり注目されてこなかった。

それでも近年、在日留学生の日本における就職難の実態や、中国、韓国、台湾等における帰国留学生の採用の厳選化などが先行研究によって検討され始めている。こうした検討から、留学生が自動的に「グローバル人材」となるわけではないことが窺える。留学生も競争力のある「グローバル人材」として育てられることを望んでいる。

そこで、本研究では、近年のグローバル化の状況を踏まえた上で、在日留学生の「グローバル人材」形成に着目し、留学生受け入れ理念である「高度人材獲得モデル」時代に求められる留学生教育の在り方について考察した。

本研究の問題関心に関連する先行研究は、「日本の大学におけるグローバル人材育成」、「留学生の日本での就職」、「日本留学の留学効果」という 3 つの研究群として整理した。しかし、日本留学を通した「グローバル人材」形成についての説明はまだ終わっておらず、共通の課題として以下の 3 点が挙げられる。

第 1 に、日本の大学における「グローバル人材」育成についての研究は、政策、制度、大学の取り組みに集中している。その動向や特徴は明らかにされているものの、ミクロレベルでの研究、つまり実際にこうした構造の中で学ぶ留学生の経験や、留学生当事者の視点からみた人材形成の実態はまだ明らかになっていない。

第 2 に、在日留学生の留学経験における人材形成の全体を視野に入れた研究がなされていない。これまでの研究は、在学中の異文化適応の課題、日本の新卒採用慣習への戸惑いについての課題、就業後の日本留学効果や外国人社員としてのキャリア形成の課題などを取り上げてきた。しかし、それぞれが別々の研究として考察されているため、得られた知見も部分的なものでしかなく、在日留学生の人材形成の実態を十分に説明できていない。

第 3 に、在日留学生の経験への理解は、いかにして日本の社会、大学、採用・雇用慣習への「適応」を促進できるかという「適応」の視点から捉えたものが多い。それゆえ、留学生の不適応に関連する比較的静的な相関性や意識の特徴は明らかにされているものの、留学生がいかに能動的に囲まれた環境を理解し、解釈し、そして行動して修正するのかという、留学生の経験のダイナミックな過程や意味世界についてはまだ十分に説明されてい

ない。

そこで、本研究では、留学による「自己形成（self-formation）」の視点—留学生を能動的な主体として捉え、どのようにして自らが置かれている環境とやり取りをし、新しい自己にたどり着くのかという視点—から留学生の経験を検討した。また、「在学中」、「職業への移行」、「就業後」という３つの段階に着目し、来日から就職後までを「一つの経験の全体」として捉え、留学生が「グローバル人材」として形成した経験とそれらの経験に対する意味解釈を明らかにした。

研究方法としては、質的研究の手法を採用した。具体的には、56 名の外国人留学生・元留学生に対するインタビュー調査を行っている。本研究は、先行研究や政策文書で提起された「グローバル人材」の定義から留学生の留学成果を演繹的に検証するものではない。留学生の語りの内側から、彼・彼女らにとっては意味のある経験と、経験に対する彼・彼女たち自身の解釈から浮かび上がったものを帰納的に分析する試みである。

第 1 章では、序論として、研究の背景、目的、視点、先行研究の考察、本研究の問題設定および研究方法について述べた。第 2 章から第 4 章では、本研究の結果として、データから浮かび上がったテーマに沿いながら留学生の経験と意味世界を詳細に描き出した。

第 2 章では、「在学中の経験」に焦点を当てて検討した。まず、留学生にとって有意義な日本留学の経験や成果から、「グローバル人材」に関連する能力・姿勢をまとめ、その経験の内容、形成過程の特徴、そして留学生自身による意味解釈を描き出した。続いて、それらの経験から浮かび上がった「日本の慣習に馴染もうとする中での自己形成」と「多文化共生コミュニティに参加する中での自己形成」という２つの経験パターンを示し、そこに反映されている留学生を取り巻く学習環境の特徴を浮き彫りにした。さらに、それぞれの学習環境の特徴における「グローバル人材」形成・育成の課題について考察した。

第 3 章では、「職業への移行期」に焦点を当て、留学生の日本における就職活動の参加経験に絞って検討した。まず、留学生の経験から浮上した、日本の新卒採用で期待される人物像に当てはめるための対策・行動の熟練過程について描き出した。本研究では、「人物像選考対応スキル」と名付けている。続いて、その熟練過程にみられた「個人化されている熟練パターン」と「大学の学習環境に促進されている熟練パターン」という２つの経験パターンを示し、それぞれの経験と反映されている構造的な文脈の特徴を浮き彫りにした。さらに、熟練段階への到達にたどり着かなかった留学生の経験から、こうしたスキルの熟練や、期待される人物像に当てはまらない新卒採用慣習の構造、そして文化間移動者という体質がもたらした制約の存在について分析した。

第 4 章では、「卒業後の就業経験」に焦点を当て、職業における日本留学経験の活用について検討した。まず、元留学生が「グローバル人材」として働いている経験を描き出し、本研究が「知日力」と呼ぶ能力・資質が重要な位置にあることを明らかにした。次に、「知日力」を基盤にして、様々な形で日本と台湾、あるいは世界を繋げる「架け橋」の役割を果たしている元留学生の活躍の様相と、こうした働き方の意味について描き出した。

さらに、日本留学経験の活用にかかわる母国労働市場の構造と、グローバル経済環境といった広い文脈を視野に入れて元留学生の働き方を検討した。その結果、グローバル経済

環境の変化に伴う「知日力」の効果の後退という状況や、それに伴って新たな活躍の場を探さなければならないという元留学生が直面している課題が浮き彫りとなった。

第 5 章では、リサーチクエスチョンに答える形で、研究結果の綜合考察を行った。本研究では、在日留学生の、在学中から就業後に渡る「グローバル人材」形成の経験と、経験に反映されている留学生を取り巻く学習環境や社会的文脈の特徴が明らかとなった。主要な知見は以下の 3 点にまとめられる。

第 1 に、日本語による学位取得を目指す留学生の経験から、「知日力修業モデル」という日本の留学生教育の特徴を浮き彫りにした。研究生期間、研究室文化、新卒採用慣習等、明確な規則やプログラムが定められていない慣習の中で、留学生は、自身の観察や模索、試行錯誤を通して次第に要領を理解するようになり、それを通して高い「知日力」を身に付けていったことが解明された。一方、こうした留学生教育は、「教養的グローバル人材形成」においては十分に機能しているが、特定の労働市場における競争力の向上につながる「労働市場的グローバル人材形成」においては十分に応えられていないことが明らかとなった。

第 2 に、職業への移行期における「グローバル人材」形成を説明するには、「人物像選考対応スキル」の熟練過程が重要であることを提起した。熟練していく過程の中で、留学生が、自己への再認識、新たな価値観や物事の見方の生成といった自己形成を果たしていることがわかった。

しかし一方で、留学生が所属する大学の学習環境によって、スキルの熟練度合いや自己形成の機会を規定されるという訓練機会の不均等についての課題が見られた。さらに、スキルを熟練して初めて評価されることが可能となるという実態から、日本の新卒採用慣習では、日本人学生と比較的同質な留学生が選出され、多様性を持つ人材を見逃す可能性があることを指摘した。それは、留学生が持つ文化間移動者の特性や、新卒採用慣習の構造が制約となる場合があり、期待される人材像に当てはまりきれない、もしくは当てはまることを拒否する留学生がふるい落とされているからである。

第 3 に、日本留学経験者の「グローバル人材」としての働き方を理解するには、「知日力」という捉え方が重要であることを提起した。これまで、「グローバル人材」としての活躍は「知日力」が中核的な位置にあった。「知日力」によって、日本と母国もしくは世界をつなぐ「架け橋役」を担うことは、留学経験の活用という意味で、仕事の満足感、やりがい、達成感を得ることに大きく関係している。

しかし一方で、グローバル経済における影響力の多極化、新興市場の多元化といった局勢の変化によって、労働市場における「知日力」の効果が相対的に後退している。その中で、彼・彼女らは、よりグローバルを見据えた働き方が求められるという課題に直面している。そのため、長期的なキャリア形成展望として、両国間の仲介者にとどまらず、特定の専門で自ら積極的に価値を創造する「創造的な架け橋役」となることを望んでいることも明らかとなった。

第 6 章では、終章として、本研究の理論的意義、実践的な意義、そして総括と今後の課題について述べた。

本研究の理論的意義は 3 点ある。

第 1 に、「留学による自己形成」という視点を、在日留学生の「グローバル人材」形成経験に応用し、これまで在日留学生の実態を理解するためによく使われてきた「異文化適応」の枠組みでは見えてこなかった実態や様相を明らかにしたことである。本研究では、「グローバル人材」形成過程における留学生の能動性、ダイナミックな形成過程、所属大学による経験の多様性を描き出した。

第 2 に、日本留学の「グローバル人材」形成の現状や課題を説明する新たな捉え方を提起した点である。留学生の経験と意味解釈から浮上した「知日力」、「知日力修業モデルの留学生教育」、「労働市場的グローバル人材形成」、「人物像選考対応スキル」、「新卒採用型グローバル人材」等の概念を提示し、日本の大学、新卒労働市場等、留学生を取り巻く学習環境の構造的文脈的な特徴を浮き彫りにした。

第 3 に、「グローバル人材」形成を理解するには、特定の時点に焦点を合わせるのではなく、在学中から就業後に渡る人材形成過程を一つの連続的なものとしてみるという捉え方を提起し、より緻密な説明ができたことである。

そして、本研究の実践的な意義は 4 点ある。

第 1 に、日本語による学位取得を目指す留学生には、日本の大学に入学した後、異文化適応のための支援だけでなく、「労働市場的グローバル人材形成」のための教育を提供する重要性があることを提起した。

第 2 に、職業への移行期において、日本の新卒採用慣習が比較的日本人学生と同質の留学生を選出しているという実態から、多様性を持つ留学生人材を見逃さないよう、より多様性に開かれたシステムが求められることを指摘した。

第 3 に、就業後において、元留学生人材の活用は、日本人の代替や補充、仲介者だけではなく、「創造的な架け橋」としての活躍を考える必要があることを提起した。それは、留学生のキャリア形成展望を充足させると同時に、送り出し国・受け入れ国にとっても最大限の人材活用となる。

第 4 に、日本留学のオリジナル効果を提起した。世界規模で優秀な留学生の獲得競争がある中で、日本が他国と差異化された魅力的な留学先となるために、「グローバル人材」の育成教育を整えると同時に、日本留学が持つ独自の強みを意識して確保することが重要であることを示した。